

# 彌次行

泉鏡花

青空文庫



いま 今は然る憂慮なし。おほつか 大塚より氷川へ下りる、たら／＼坂は、  
 あたか よしのせいけいしたく もん 恰も 芳野世經氏宅の門について曲る、昔は辻斬ありたり。こゝ  
 いうれいざか ねこまたざか に幽靈坂、猫又坂、くらがり坂など謂ふあり、好事の士は尋  
 たんぼ ぬべし。田圃には赤蜻蛉、案山子、鳴子などいづれも風情なり。  
 そのいうれいざか 天麗かにして其幽靈坂の樹立の中に鳥の聲す。句になるね、と  
 こゝろえ 知つた振をして聲を懸くれば、何か心得たる様子にて同行の  
 うでぐみ きたはち 北八は腕組をして少時黙る。  
 ひかはじんじや いしだん 氷川神社を石段の下にて拜み、此宮と植物園の竹  
 あひださか のぼ 藪との間の坂を上りて原町へ懸れり。路の彼方に名代の護謨  
 せいざうしよ せいざうしよ 製造所のあるあり。職人眞黒になつて働く。護謨の句面

を打つ。通り抜ければ木犀の薫高き横町なり。これより白くさんの裏に出でて、天外君の竹垣の前に至るまでは我々之を問道と稱へて、夜は犬の吠ゆる難處なり。件の垣根を差しのぞき、をぢさん居るか、と聲を懸ける。黄菊を活けたる床の間の見透さるゝ書齋に聲あり、居るゝと。

やがて着流し懐手にて、冷さうな縁側に立顯れ、莞爾として曰く、何處へ。あゝ北八の野郎とそこいらまで。まあ、お入り。いづれ、と言つて分れ、大乘寺の坂を上り、駒込に出づ。

料理屋萬金の前を左へ折れて眞直に、追分を右に見て、むかうへ千駄木に至る。

路に門あり、門内兩側に小松をならべ植ゑて、奥深く  
 住へる家なり。主人は、巢鴨邊の學校の教授にて知つた人。  
 北八を顧みて、日曜でないから留守だけれども、氣の利いた  
 小間使が居るぜ、一寸寄つて茶を吞まうかと笑ふ。およしよ、  
 と苦い顔をする。即ちよして、團子坂に赴く。坂の上の煙草屋  
 にて北八嗜む處のパイレートを購ふ。勿論身錢なり。此の舶  
 來煙草此邊には未だ之れあり。但し濕つて味可ならず。  
 坂の下は、左右の植木屋、屋外に足場を設け、半纏着の  
 若衆蜘蛛手に搦んで、造菊の支度最中なりけり。行く／＼  
 フと古道具屋の前に立つ。彌次見て曰く、茶棚はあんなのが可  
 いな。入らつしやいまし、と四十恰好の、人柄なる女房

奥より出で、坐して慇懃に挨拶する。南無三聞えたかときよ  
つとする。爰に於てか北八大膽に、おかみさん彼の茶棚は  
いくら。皆寒竹でございます、はい、お品が宜しうございます、  
ごゑんろくじつせん五圓六十錢に願ひたう存じます。兩  
人顔を見合せて思入あり。北八心得たる顔はすれども、さすがにどぎまぎし  
て言はむと欲する處を知らず、おかみさん歸にするよ。唯々。  
お邪魔でしたと兄さんは旨いものなり。虎口を免れたる顔色の、  
何うだ、北八恐入ったか。餘計な口を利くもんぢやないよ。  
思ひ懸けず又露地の口に、抱餘る松の大木を筒切にせ  
しよと思ふ、張子の恐しき腕一本、荷車に積置いたり。追て、  
大江山はこれでごさい、入らはいくと言ふなるべし。

笠森かさもり稻荷いなりのあたりを通る。路傍みちばたのとある駄菓子屋だぐわしやの奥おくより、  
 中形ちうがたの浴衣ゆかたに繻子しゆすの帯おびだらしく、島田しまだ、襟えり白粉おしろい、襷たすきがけな  
 るが、緋禪ひこんを蹴返けかへし、ばたくと駈かけて出いで、一寸ちよつと、煮豆屋にまめやさ  
 んく。手てには小皿こざらを持ちたり。四五軒しごけん行過ゆきすぎたる威勢ゐせいの善よき煮  
 豆屋まめや、振返ふりかへりて、よう！と言いふ。  
 そら又また化性けしやうのものだと、急いそぎ足あしに谷中やなかに着つく。いつも變かはら  
 ぬ景色けしきながら、腕うでと島田しまだにおびえし擧句あげくの、心こゝろ細ほそさいはむ方かた  
 なし。

森もりの下したの徑こみちを行ゆけば、土濡つちぬれ、落葉おちばしめ濕しめれり。白張しらはりの提灯ちやうちん  
 に、薄うすき日影ひかげさすも物淋ものさびし。苔蒸こけむし、櫛しきみ枯かれたる墓はかに、門もんのみ  
 いかめしきもはかなしや。印しるしの石いしも青あをきあり、白しろきあり、質滑しなめらかに

して斑ふのあるあり。あるが中なかに神婢しんびと書かいたるなにかしの女ぢよが耶や蘇そ教徒けうとの十字形じふじがたの塚つかは、法のりの路みちに迷まよひやせむ、異國いこくの人の、友ともなきかと哀深あはれかし。

竹たけの埒結うちゆひたる中なかに、三四人さんよにん土つちをほり居ゐるあたりにて、路みちも分わからずなりしが、洋服やうふく着きたる坊ぼうちやん二人ふたり、學校がくかうの戻もどりと見みゆるがつかくとほと通とほるに頼母たのもしくなりて、後あとをつけ、やがて木この間まに立たつ湯氣ゆげを見みれば掛茶屋かけぢややなりけり。

休やすましておくれ、と腰こしをかけて一息ひといきつく。大分だいぶお暖あつたかでござい  
ますと、婆ばあは銅あかのかねの大藥罐おほやくわんの茶ちやをくれる。床しやうぎ几したの下たはらに俵はらを敷しけるに、犬いぬの子こ一匹いつびき、其日そのひの朝あさより目めの見みゆるもの由よし、漸やつしよくと食くづきましたとて、老としより年ねんの餘念よねんもなげなり。折をりから子こを背せなに、御ご

新造しんぞう一人、片手かたてに蝙蝠傘かうもりがさをさして、片手かたてに風車かざぐるまをまはし  
 て見みせながら、此この前まへを通とほり行ゆきぬ。あすこが踏切ふみきりだ、徐々そろく  
でか出懸でかけようと、茶店ちやてんを辭じす。  
 何どうだ北八きたはち、線路せんろの傍わきの彼あの森もりが鶯花園あうくわゑんだよ、晝あに描かいた  
 天女てんによは賣藥ばいやくの廣くわうこく告こだ、そんなものに、見惚みとれるな。おつ  
 と、また其古道具屋そのふるだうぐやは高さたかうだぜ、お辭儀じぎをされると六むつヶしいぞ。  
 いや、何なにか申まをす内うちに、ハヤこれは笹ささの雪ゆきに着ついて候さくらふが、三時さんじすぎ  
みせにて店みせはしまひ、交番かうばんの角かどについて曲まがる。この流ながれに人集ひとつどひ葱ねぎを  
あら洗あらへり。葱ねぎの香かの小川をがはに流ながれ、とばかりにて句くにはならざりしが、  
 あゝ、もうちつとで思おもふこといはぬは腹はらふくるゝ業わざよといへば、  
 いま一ひとあしはや足早あしはやかりせば、笹ささの雪ゆきが賣切うりきれにて腹はらふくれぬ事ことよとい

ふ。さあ、じぶくらずに、歩行いたく。

ちよつとちかゞ一寸伺ひます。此路を眞直に参りますと、左様三河島

と、路を行く人に教へられて、おやくと、引返し、白壁の

見ゆる土藏をあてに他の畦を突切るに、ちよろく水のある中に

紫の花の咲いたる草あり。綺麗といひて見返勝、のんきにうし

ろ歩行をすれば、得ならぬ臭、細き道を、肥料室の挾撃な

り。目を眠つて呐喊す。既にして三島神社の角なり。

亡なつた一葉女史が、たけくらべといふ本に、狂氣街道

といつたのは是から前ださうだ、うつかりするな、恐しいよ、と

固く北八を警戒す。

やあ汚え溝だ。恐しい石灰だ。酷い道だ。三階があるぜ、

浴衣ゆかたばかりの土用干どようぼしか、夜具やぐの裏うらが眞赤まつかな、何なんだ棧橋さんばしが突立つたつてら。叱しつ！ 黙だまつてくと、目めくばせして、衣紋坂えもんざかより土手どてに出いでしが、幸さいひ神田かんだの伯父おぢに逢あはず、客待きやくまちの車くるまと、烈はげしいひとどほり眞晝間まっぴるま、露店ほしみせの白しろい西瓜すゐくわ、埃ほこりだらけの金鰐焼きんつばやき、人通にんつうの眞晝間まっぴるま、露店ほしみせの白しろい西瓜すゐくわ、埃ほこりだらけの金鰐焼きんつばやき、おでんの屋臺やたいの中なかを抜ぬけて柳やなぎの下したをさつくと行く。實じつは土手どての道だうてつ哲てつに結縁けちえんして艶福えんぷくを祈いのらばやと存ぞんぜしが、まともに西日にしびを受うけたれば、顔かほがほてつて我慢がまんならず、土手どてを行ゆくこと纒わづかにして、日蔭ひかげの田町たまちへ遁にげて下おりて、さあ、よし。北八きたはち大丈夫だいぢやうぶだ、と立直たちなほつて悠然いうぜんとなる。此邊このあたせ小ぢんまりとしたる商賣あきなひやの軒のきならび、しもたやと見るは、産婆さんば、人相見にんさうみ、お手紙てがみしたゝめ處どころなり。一軒いつけん、煮染屋にしめやの前まへに立ちて、買物かひものをして居あつた中年ちゆうどし

増まの大丸おほまるまげ鬚かみ、紙かみあまた積つんだる腕車くるまを推おして、小僧こぞう三人向さんになむか

うより來きか懸りしが、私語しごして曰いはく、見みねえ、年ねん明あけだと。

路みちに太郎たらう稻荷いなりあり、奉納ほうなふの手て拭堂ぬぐひだうを蔽おほふ、小ちき鳥居とりゐ夥おびた多た

し。此處こゝ彼處かしこ露地ろぢの日ひあたりこゝに手習てならひ草紙くさじを干ほしたるが到いたる處ところに

見みゆ、最いともしをらし。それより待乳山まつちやまの聖しやう天てんに詣まうづ。

本堂ほんだうに額ぬかづき果はてて、衝つと立たちて階きざの方はしかたに歩あゆみ出いでたるは、年と

紀しはやうく二十はたちばかりと覺おほしき美人びじん、眉まゆを拂はらひ、鐵漿かねをつけた

り。前まへ垂だれがけの半纏はんてんぎ着き、跣足はだしに駒下駄こまげたを穿はかむとして、階下かいか

について居ゐる下足番げそくばんの親仁おやぢの伸のびをする手てに、一寸ちよつと握にぎらせ行く。

親仁おやぢは高たか々と押おしいた戴ぎき、毎度まいど何なんうも、といふ。境内けいだいの敷し

石いしの上うへを行ゆきつ戻もどりつ、別べつにお百度ひやくどを踏ふみ居ゐるは男女なんによふたり二人

なり。女は年紀四十ばかり。黒縮緬のくろちりめん一ツ紋ひともんの羽織はおりを着きて足袋たび
  
 踏足はだし、男は盲めくらじま縞はらがけの腹掛も、ひき、股引いろどり、彩しちふくじんある七福神もやうの模様を
  
 織りたる丈たけなが長さしこき刺子きを着たり。これは素すはだし踏足いりちが、入交ひになりひになり、
   
 引違ひきちがひ、立交たちかはりて二人ふたりとも傍目わきめも觸ふらず。おい邪魔じやまになると
   
 悪いよと北八きたはちを促うながし、道みちを開ひらいて、見晴みはらしに上のぼる。名なにし負おふ
   
 今戸いまどあたり、船ふねは水みづの上うへを音おともせず、人ひとの家いへの瓦屋根かはらやねの間あひだを行
   
 交きかふ様手さまてに取とるばかり。水みづも青あをく天てんも青あをし。白帆しらほあちこち、處ところ
  
 々／＼煙突えんとつの煙けむりたなびけり、振ふりさけ見みれば雲くももなきに、傍かたはらには大
   
 樹いじゆ蒼空あをぞらを蔽おほひて物ものぐらく、呪のろひの釘くぎもあるべき幹みきなり。おなじ
   
 臺だいに向むかうはちまき巻きしたる子守女こもりをんな三人さんにんあり。身からだ體たを揺ゆり、下駄げたに
   
 て板敷いたじきを踏鳴ふみならす音おとおどろくし。其そのま、渡場わたしばを志こゝろざす、石いしだ

段んの中途ちゆうとにて行逢ゆきあひしは、日傘ひがささしたる、十二じふにばかりの友いうぜんち禪ぜん

縮りめん緬をどり、踊こ子か。

振ふりかへ返かへれば聖しやうでん天もりの森もり、待まつ乳ちしづ沈ちんんで梢こずありこ乘ま込こむ三さん谷や堀ぼりは、此こ

處ゝだ、此處こゝだ、と今戸いまどの渡わたに至いたる。

出でますよ、さあ早はやくく。彌次やじ舷端ふなばたにしがみついてしやがむ。

北きた八はち悠いうぜん然ぜんとパイレートをくゆらす。乗のり合あ十じふ四し五ご人にん、最さい後ごに

腕わん車しやを乗のせる。船ふね少せうし右みぎへ傾かたむく、はツと思おもふと少すこし蒼あをくなる。

丁とんと棹さそをつく、ゆらりと漕こぎ出だす。

船頭せんとうさん、渡場わたしばで一番いちばん川幅かははらの廣ひろいのは何處どこだい。先まづ

此處こゝだね。何なんちやう町ぐらゐ位ゐあるねといふ。唾つば乾かわきて齒はの根ねも合あはず、

煙管きせるは出だしたが手てが震ふるへる。北八きたはちは、にやりく、中流ちゆうりうに至いた

ころほ いっせんじようき 一 錢 蒸 汽 の 餘 波 來 る、よはきた ぴツたり突伏して了ふ。あぶね 危えと  
 いふは せんとう 船 頭 の 聲、こゑ ヒヤアと肝を冷す。はか 圖らざりき、せ 急かずに  
 二の句を續けるのを聞いて、めひら 目を開けば むかうじま 向 島 なり。それ  
 より ひやくくわゑん 百 花 園 に 遊 ぶ。たそがれ 黄 昏 たり。  
はぎく 萩 暮 れて すゝき 薄 ま ば ゆふひ ゆき 夕 日 かな  
い 言 ひ つ く す べ く も あ ら ず、あきぐさ 秋 草 の 種 々 かぞ 數 ぶ べ く も あ ら じ  
きたはち 北 八 が このさく 此 作 の 如 き は、ゑんない 園 内 に 散 ば っ た る 石 碑 せきひたんじや 短  
く 冊 の 句 と いっばん 一 般、なんじふせんばん 難 澁 千 萬 に 存 ず る な り。  
しやうぎ 床 几 に 休 び うちなが 打 眺 む れ ば、きやくいくくみ 客 幾 組、たかぼう 高 帽 の 天 窓、はおり 羽 織 の  
かたむらさき 紫 の 袖、かみ 紅 の 裙、うすき 薄 に見え、はぎかく 萩 に 隠 れ、かるかや 刈 萱 に 搦 み、くす 葛 に  
ま 絡 び、ふよう 芙 蓉 に そ よ ぎ、なび 靡 き 亂 れ、はな 花 を 出 づ る 人、はな 花 に 入 る 人、はな 花

をめぐる人、皆此花より生れ出でて、立去りあへず、舞ひあり  
 く、人の蝶とも謂ひつべう。

などと落雁を囓つて居る。處へ！ 供を二人つれて、車夫

體の壯佼にでつぷりと肥えた親仁の、唇がべろくとして無

花果の裂けたる如き、眈の下れる、頬の肉掴むほどあるのを負

はして、六十有餘の媪、身の丈拔群にして、眼鋭く鼻の上の

皺に悪相を刻み齒の揃へる水々しきが、小紋縮緬のりうた

る着附、金時計をさげて、片手に裳をつまみ上げ、さすがに茶

澁の出た脛に、淺葱縮緬を揃ませながら、片手に銀の鎖を握

り、これに渦毛の斑の艶々しき狝を繫いで、ぐいぐと手綱の

やうに捌いて來しが、太い聲して、何うちや未だ歩行くか、と言

ふく人も無げにさつさつと縦横に濶歩する。人に負はして  
 連れた親仁は、腰の抜けたる夫なるべし。驚破秋草に、あやか  
 しのついて候ぞ、と身構したるほどこそあれ、安下宿の娘と  
 書生として、出来合らしき夫婦の來りしが、當歳ばかりの嬰  
 かんぼ 兒を、男が、小手のやうに白シャツを鎧へる手に、高々と  
 抱いて、大童。それ鼪の道を切る時押して進めば禍あり、山  
 に櫛の落ちたる時、之を避けざれば身を損ふ。兩頭の蛇を見  
 たるものは死し、路に小兒を抱いた亭主を見れば、壽長からず  
 としてある也。ああ情ない目を見せられる、鶴龜々々と北八と  
 とも寒くなる。人の難儀も構はばこそ、瓢箪棚の下に陣取りて、  
 坊やは何處だ、母ちゃんには、見えないよう、あばよといへ、ほ

ら此處だ、ほらほらは、は、おほ、と高笑。弓矢八幡

もう堪らぬ。よいくの、犬の、婆の、金時計の、浅葱の禪の、

其上に、子抱の亭主と來た日には、こりや何時までも見せ

られたら、目が眩まうも知れぬぞと、あたふた百花園を遁げ

て出る。

白髯の土手へ上るが疾いか、さあ助からぬぞ。二人乗、小

官員と見えた御夫婦が合乗也。ソレを猜みは仕らじ。妬きは

いたさじ、何とも申さじ。然りながら、然りながら、同一く子持

でこれが又、野郎が膝にぞ抱いたりける。

わツといつて駈け抜けて、後をも見ずに五六町、彌次さん、

北八、と顔を見合はせ、互に無事を祝し合ひ、まあ、ともかく

も橋を越さう、腹も丁度北山だ、筑波おろしも寒うなつたと、  
 急足になつて来る。言問の曲角で、天道是か非か、  
 又一組、之は又念入な、旦那様は洋服の高帽子で、而  
 して若様をお抱き遊ばし、奥様は深張の蝙蝠傘澄して押  
 しなら並ぶ後から、はれやれお乳の人がついて手ぶらなり。えゝ！  
 日本といふ國は、男が子を抱いて歩行く處か、もう叶はぬこり  
 やならぬ。殺さば殺せ、とベツたり尻餅。  
 旦那お相乗参りませう、と折よく來懸つた二人乗に這ふや  
 うにして二人乗込み、淺草まで急いでくんな。安い料理屋で縁  
 起直しに一杯飲む。此處で電燈がついて夕飯を認め、やゝ  
 人心地になる。小庭を隔てた奥座敷で男女打交りのひそ

く話、本所も、あの餘り奥の方ぢやあ私厭アよ、と若い聲の  
 媚めかしさ。旦那業平橋の邊が可うございますよ。おほ、と  
 老けた聲の恐しさ。圍者の相談とおぼしけれど、懲りて詮  
 議に及ばず。まだ此方が助りさうだと一笑しつゝ歸途に就く。  
 噫此行、氷川の宮を拜するより、谷中を過ぎ、根岸を歩行き、  
 土手より今戸に出で、向島に至り、浅草を経て歸る。半  
 日の散策、神祇あり、釋教あり、戀あり、無常あり、  
 景あり、人あり、従うて又情あり、錢の少きをいかにせむ。

明治三十二年十二月





# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「彌次行《やじかう》」となっています。

※表題の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年4月24日作成

2016年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 彌次行

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>